記憶がないっ！

相馬正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶がないっ！

【Ｎコード】
Ｎ２９２１Ｗ

【作者名】
相馬正

【あらすじ】
目が覚めると、記憶が失われていた。唯一覚えていたキーワードは“秘密”。携帯に残された履歴を頼りに、親しいと思われる５人に近付いてゆくのだが…。　※全５話（２６部予定です）

第一話　記憶がないっ！

「このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「わかった」

……

……

…

ドサッ

「いって」

顔と腰に軽い痛みが走った。

んああ？　ベットから落ちたのか。

薄らぼんやりとした中、這うようにベットに戻る。

さっきのは夢…か。なんか意味深だったよな“秘密”とか言って、

でも…秘密ってなんだっけ？　確か場所は河原で、二人が立ってて

…、相手は…誰だった？

あれ？　いや、待てよ？

そんなことより…、ええと…、なんて言えばいいんだ？

そうだ“自分”！　自分はいったい…誰なんだ？

記憶が…ないっ！！！

「くぁっ！」

ショックの反動で上体が起き上がった。

「っと」

勢い余ってまたベッドから落ちそうになる。

「最悪だ。“自分は誰だ？”なんて…そんなのありか？」

完全に目が覚めて二度寝どころじゃない。ベットから足だけおろし、目の前を見るとすぐに次の衝撃が…。

「ちょっ…、ここどこだ？」

駄目だ、ちょっとしたパニックだ。とにかくひとつずつ整理しないと。

―まず、ここはどこか?―

ここは六畳ほどの部屋で、机、ラック、洋服棚、そして今自分が座っているベットがある。

このベッドに一人で寝ていたとすると、十中八九ここは自分の部屋…だよな?

いや、知人の家に泊まりにきている…、なんて可能性もありか。

待て待て、そんな可能性まで言い出したらきりがない。この部屋を出れば嫌でも判るんだ、ここがどこかなんて大した問題じゃない。

―じゃあ、自分は誰なのか?―

そうだ、これこそ問題だ。自分の名前が判らない、どんなやつかも思い出せない。

さっきから“自分”、“自分”って違うよな? 普通は自分のことを“僕”とか“俺”とか言うハズだ、それすらも判らない…。

ゾクッ

急に身震いした。気付くと体中からいけない汗が噴き出していた。

「これって、寝汗…なわけないよな」

まさに、えも言われぬとはこのことだ。頭では理解できなくても体は直感的に危険信号を発してるんだ。

駄目だ、取り乱しちゃいけない。とにかく一度冷静になろう。

「ふぅー」

静かに深呼吸した。

落ち着け、一時的に混乱しているだけかもしれない。人の名前を忘れたり、「ナ」行が一つ出てこなかったり、よくあることだ。今はとにかく情報を集めよう。

何かがキッカケになれば、ポーンと全て思い出して元通り…。

そうだ、きっとそうに違いない！

大丈夫だ問題ない。そう自分に強く言い聞かせた。

―自分に関する情報を探そう―

改めて部屋を見回した。

飾り気のない殺風景な部屋だ。テレビやオーディオ、パソコンといった家電の類がひとつもない。それだけじゃない、本やマンガ、ゲームといった趣向が判りそうなものすら何もない。いや、無趣味というのであれば個性になるか。

だとすると、自分は結構いい歳なんじゃないか？　そう思った矢先、壁に掛かっている服を見て目を疑った。

「これは、学校の制服？　ってことは学生！？」

部屋のドアの横に全身が映せる大きな鏡がある。近付いて恐る恐る鏡を覗き込んだ。

そこには確かに学生…、おそらく高校生くらいの男の子が立っていた。

「これが…自分の姿」

まじまじと下から全身をなめる。自分で言うのもなんだが、スラッ

としていてカッコいい。顔つきがちょっと軟派な感じもするけど、切れ長な目をしたいわゆるイケメンがそこにいた。
鏡の中にいる見ず知らずのイケメンは、手を動かしたり首を動かすと、自分の思い通りに動く、まるで操り人形でも動かしているような不思議な感覚だ。
そういえば昔、人の中身が入れ替わるストーリーの映画があったな。あれも確か学園ものだった。やっぱりこういうことって多感な年頃に起こったりするものなのかな。

学園…？　そうだ、生徒手帳！
さっきの制服に手を伸ばし、ポケットの中を全て探した。しかし、何も入っていない。机の中も探したが、ここにも入っていない。おかしい…、生徒手帳どころか何もない。学生っていうには持ち物がなさ過ぎやしないか？

手掛かりのないまま時間だけが過ぎる。未だ自分の名前すら判らない。
そうこうしているうちに、カーテンの隙間から明かりが射し込み始めた。時計に目をやると針は7時前を指していた。
学生だったらもうすぐ登校しないといけない時間だ。だけど、今日が何曜日かも判らない。平日？それとも休日？どちらにせよ、この部屋に手掛かりがない以上、外に出るしかない。
ここにずっと引き籠っても、いつか誰かが入ってくる。とてもじゃないがそれこそ恐ろしい。

―外へ出よう―

ドアノブに手をかけると、その手は汗ばんでいた。
ただドアノブを回すだけなのに、今までこんなに勇気が要ったこと

があっただろうか。

「“今まで”って？　そもそも今より前の記憶なんてないし」

ふと発した一言、“今まで”って、冗談か？
この状況で自分が冗談を言うとは…、それがとてもおかしく思えた。

ほんの小一時間とはいえ、その僅かな行動の積み重ねが気持ちにゆとりをもたらしたのなら…、いろいろ経験することは記憶を呼び覚ますキッカケになるんじゃないか？

自然と制服に手が伸びる。

「学校…行ってみよう」

シャツにズボン、ブレザーを順に着て、改めて鏡の前に立った。

「って！　茶髪かよっ！？」

さっきは薄暗くて判らなかったが、真っ先に茶色い髪が目に入った。
それにこのだらしなく着くずした制服姿はなんだ？　もしかして、自分は少々“やんちゃ”なんじゃないだろうか？

「よし！　一人称は“俺”でいってみるか」

少しずつだけど、着実に前進している。すべては外へ向かう一歩を後押ししているようだ。
再びドアノブに手をかけると、さっきまでの汗は嘘のように引いていた。

ガチャリ

―いざ、自分探しへ―

第一話　2

部屋を出ると、左手に襖の部屋、向かいにもうひと部屋、右手にはトイレと下に続く階段が見えた。どうやらここは一般的な一戸建てのようだ。
できるだけ戸は開けたくないから、ここは素直に一階へ行こう。

下に降りようとすると、階段の下にいた女の子と目があった。彼女は目をまん丸に見開いている。

「お、…おはよ」

と、言ったかと思ったら、こっちが返事をする間もなくその場を去ってしまった。
一瞬の出来事でよく見えなかったが、彼女は黒髪のショートカットで、多分俺とは違う学校の制服を着ていた。見た目も俺より幼かったような気がする。
あの反応からすると家族…だよな？　てことは、そうか、俺には妹がいたのか。
恐る恐る階段を下りると、さっきの子の声がした。声はすりガラス調のドアの向こうから聞こえてくるようだ。

「お母さん、お母さん大変！　お兄ちゃんが起きてきたよ！　しかも制服着てる！」

「まあ！」

“まあ！”ってなんだよ。
もしかして俺は引き籠りだったのか？　この頭とこのなりでオタク

だったとしたら…、ナルなキモい奴じゃないか！
や、やっぱり“僕”って言うべきか、いやいや、そもそもオタクだったら“拙者”がいいのか？
ええい普通が一番！

ドアを開けると、さっきの妹と母親らしき人が一緒に朝食をとっていた。
と、とりあえず朝の挨拶だ。

「おはよ…」

「お、おはようキリオ。あ、朝ご飯食べるわよね？」

「た、食べよっかな」

「ちょっと待ってね、すぐ用意するから」

思いのほか若い母親らしき人がとても動揺している。
まあそこはいいとして…、ついに名前ゲットだ！
俺は“キリオ”！　名字は？　何キリオだ？　焦るな、それは後で表札を見ればいいじゃないか。

―名前があった―

当たり前のことなのに、俺はちょっと感動していた。

テーブルは４人掛けで、妹と母は向い合せに座っている。えっと、俺はどの席に座ればいいんだ？　この場合、普通は妹の隣に座るよ

な。ふとその席を見ると妹と目が合った。
妹は慌てて目を逸らすと、パンをかき込み、ミルクティーで一気に流し込んだ。

「ごちそうサマ！　じゃ私いってきます！　お母さん携帯よろしくね」

行動がすべて駆け足だ。

「ああっズルい！」

そそくさと席を立った妹に母が漏らした一言…。
なんだなんだ？　君たち…、俺と一緒は嫌なのか？

妹が出て行き、二人きりになるとリビングは静まり返った。
母はパンとサラダと紅茶を俺に差し出し「はい」と言ったきり、一言も話さず台所仕事に専念している。その鍋はさっきも洗ってなかったか？

それにしても、テレビ…大きいな。テレビ台に入っているのは最新式レコーダーだしオーディオも立派なものだ。なぜか違和感を感じるのは気のせいか？　俺の部屋には何もなかったはずだが…、このもの凄い格差はなんだ。
もしかして俺、なんか悪いことしたのか？　まさか、“おいた”すると部屋にある物を捨てられてしまうとか？　そんなの聞いたことねぇよ！
やめやめ、どうせ考えても答えなんか出ない。

とりあえず飯を食っちまおう。
朝食を全部たいらげ、席を立ったその時

「キリオ、その携帯…アナタのよね？」

母がやっと口を開いた。

ずっとテーブルの上に不自然に置かれていた紺色の携帯、この母の携帯にしては少し色気がないと思ってたけど、やっぱり俺のだったか。

「ああ、本当だ。俺のだ」

まるで三文芝居のような台詞を吐く。

妹の去り際の言葉からも、俺の携帯じゃないかと見当をつけていたが、母から切り出すのを待っていた。しかし、半ば諦めかけて席を立ったこのタイミング…、最後の最後に迫られてやっと言いました的な感じ…。

どうやら家族と俺のコミュニケーションは上手くいっていないようだ。

「いってきます…」

「い、いってらっしゃい」

すっげー神経使うな。いったいどんな奴だったんだ俺って？　この調子じゃ他のことなんか全然聞き出せない。

家の外に出て後ろを振り返る。

「良かった。うちの屋根だけ色が青い」

バカげているが、こうした目印でもないと家に帰れないって事態が

起こりかねない。今の俺にとってはちょっとしたことが致命的なんだ。

「そうだ、表札も」

門の石造りに木彫りの表札がはめ込まれてある。そこには一文字“柳”とあった。

―俺の名前は“柳キリオ”―

「まあ悪くない響きだ」

名前が判ったところで何も思い出さなかったか…。でも、失ったものを少しづつ取り戻していけば、いつかは…。

そのまま空を仰ぐと、地球をぐるっと一周しているといわれている隕石群のリング“シフォンの帯”がハッキリと見えた。本日は快晴なり…。

そういえば、昔見た映画だったり、最新式レコーダーのことだったり、このシフォンの帯も…、自分を取り巻く環境以外の一般常識や無駄知識は覚えてるみたいだな。

つまり想い出と単なる情報とでは、脳が司る記憶の質や保管場所が違うってことか。

こうやって自分が措かれた今の境遇を客観的に見直すと、新手の脱出ゲームみたいで滑稽だな。

「あ…、滑稽なのは自分自身か、リアル過ぎて笑えねぇ…」

これがゲームだったらどれだけ良かったか…。そうだ、さっき手に入れた携帯！
学校に着くまでに自分の交友関係くらいは把握しておかないと。
電源ボタンに手をかける。
ロックはかかっていない。なんて無用心な…って、そのお陰で見れるワケだけど、なんか複雑だな。

「うわー、なんか人の携帯見るみたいで気が引ける」

まずは履歴確認と、発信は少ないな、逆に着信は結構あるぞ。

「“タケル”に“ユウ”、“カオル”に“シン”に“ヒロ”、と」

この5人がほとんどだ。主だった友達ってことか。
しっかし…男か女か判んねー名前ばっかだな。それに非通知がたまにあるのも気になる。昨日の最後の着信も非通知だ。

とにかく、まずはこの5人を探さないとな。全てはそこからだ。

第一話　3

俺が記憶喪失のことを誰にも打ち明けず、慎重になっているのには理由がある。
てか、何事もなきゃとっくに家族に打ち明けてるっての！　だけど唯一覚えていたことが邪魔をしていた。

―よくわからない“秘密”だ―

なぜか俺は、そのことを言わない約束をしてしまっている。もしかするとそれは夢の中での約束かもしれないけれど。
だけど、もし現実だったとしたら…、昨日までの俺にとっては最後の記憶で、今の俺にとっては一番新しい記憶ってことになる。過去の俺と今の俺を繋ぐ唯一の鍵…、きっと記憶を取り戻す重要な手掛かりなんだと思う。
そのせいもあって、安易に誰かに知られてはいけない気がした。
だから、今俺がすべきことは気の許せる相手を探し出し、全ての事情を打ち明け、記憶を取り戻すための協力を得ることなんだ！

とは言ったものの、たった今直面している問題をどうにかしないとな…。
学校って…どこだ？

「おっす！　キリオ！」

少し間が空いた。
ああ、“キリオ”って俺のことか。

うわっ、男でロンゲ！　しかも、俺と同じ制服、コイツは誰だ？
例の5人のうちの一人か？
なんか見た目もチャラいし、“おっす”って挨拶の返しだったら…
こうか？

「お、おう」

う…、じっとこっちを見てる。何か返事が変だったか？　こいつ体格ガッチリしてるし、ハイタッチとかした方が良かったのか？　それともやっぱり俺はオタクキャラなのか？

「どこ行くんだよ？　学校と逆方向に歩いて」

「へっ？」

「しかもお前が朝から学校なんて、今日って何かあんのか？」

「ちょ、ちょっとな」

「ふーん」

見知らぬ相手とゼロ状態から会話して、意味不明な質問さえもかわした！　何気に凄くないか俺！？
少し肩が震えてる。ピンチを切り抜けた後にくる快感にも似た感覚…、これが武者震いってやつか！
実際、ツッコミが入ったのは“学校と逆方向に向かっていた”という行動だけ、キャラ自体はスルーだったんじゃないか？　この調子ならいける！
今日は“おう”と“ちょっとな”で乗り切ってやるぜ！

「そういえばキリオ、昨日の夜電話したのに出なかったな」

「…！　悪い、ちょっとな」

昨日の夜、俺に電話した奴は二人。タケルと非通知の奴だ。
少し話しただけだが、この距離感の間柄で非通知ってことはないだろう。ってことは…、コイツはまずタケルに間違いない！
携帯の着信が一番多いのがタケルだから…、予想される俺との関係は…親友！！
待てよ？　親友がこのチャラ男ってことは、俺がオタクって説はなくなったんじゃないか？　益々いいぞ！

「何ガッツポーズしてんだ？」

「なんでもねーよ…タケル」

俺はさりげなくタケルの名前を口にし、恐る恐る横目で表情を窺った。最終確認だ。コイツの表情に疑問の色は見えない。
通った！　コイツはタケル確定だ！　いいぞ、親友ゲットだぜ！
さらにコイツと一緒なら学校にも行ける。学校までの地図もゲットだぜ！

「キリオ、今日はやけに機嫌いいな」

「ちょっとな」

「はーん、判ったぞ、お前らやっぱり付き合うことになったんだろ？　だから俺の電話無視したり、朝ちゃんと起きてんじゃないか？」

「なっ！？」

待てっ！　なんだこの流れ？　今の俺じゃどう転んだって対応できない会話だろ？　付き合う云々って、交友関係もままならないうちに恋愛話って…、そもそも相手誰だよ！　相手…って？　ちょっとだけ気になるな…。

いや、おかしくないか！？
こっちが情報を引き出そうとしてたのに、逆に質問されちまってる…。しかも、俺の行動がおかしいことと巧く繋げてきやがった。タケルの奴…、さすがに俺の親友だけのことはある。
はっ！　待てよ。そもそもこれが俺の秘密なんじゃないか？　判んねーけど、ここは迂闊に答えちゃダメだ。

「…なあ、付き合ってるかどうかは別として、何で朝起きたくらいでその話になるんだ？」

「お、なーんかうまくごまかそうとしてんだろ？　まあいっか、その口ぶりじゃ付き合ってないみたいだしな。ほら、ユウって見た目はアレで真面目だろ。だから『朝はちゃんと来なさいよ』とか『一緒に学校行こう』とか言われたんかなって。お前、さっきユウんちの方に歩いてただろ？」

なるほど、そういうことか。慎重になって正確だった。
“ユウ”といえば、あの5人の中の一人に間違いない。
整理すると、ユウは女で、見た目は今風のギャルなんだけど真面目っていうギャップがある。（多分）
さらに俺とは友達以上恋人未満の微妙な関係だ。（多分）

これで友人と恋人未満を把握したことになるな。よしよし、幸先いいぞ。

「おっはよっ！　二人とも」

また一人、今度は明るめの女子が現れた。

「おっす！」

タケルが挨拶を返す。

この子も5人の中の一人？　もしかしてこの子がユウ…？　いかんいかん意識するな。とにかく返事をしておかないと。

「お、おう」

「な～に、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

当たり前だ！　お前は誰なんだ？　ユウなのか、違うのか？

そうだ！　ユウなら見た感じはギャル…ん、んん？　黒髪のショートでもロングでもない、これはセミロングになるのか？　化粧っ気もないし、ギャルと言われれば見えなくもないが…。

「キリオとヒロはいっつも遅刻組なのに、今朝はどうしちゃったの？」

ヒロ？

「だろ、コイツ言わねーんだよ。俺はてっきりユウと付き合い出したのかと思ってよ」

「ああ、ユウ真面目だもんね。でもないない、キリオって相手に染まるタイプじゃないじゃん」

「そういやそうだな。カオルお前頭いいなー」

カオル！？

「まーねー」

いかんいかん、聞き役に徹しちゃ駄目だ。

「勝手に言ってろ」

と、口では平静を装っていたが、心の中は穏やかではない。『ナイスだタケル！』と思わず叫んでいた。

この得意気にしてる女が“カオル”か。なんかタケルといいコンビだな。

「じゃあ勝手に言うけどさー、二人ともお互いのことどう思ってんだろね？」

「カオル…それってフツー、本人がいないとこで話さねぇか？」

まったくだ。

「あそっか、今朝は珍しくキリオがいるんだった。じゃあユウの方はどうだろ？」

こいつ…わざとだろ。

「あー、俺はいい線いってると思うぜ。ユウって素直だから感情とか隠しきれないっていうか、やっぱキリオがいると違う気するもんな」

「お、タケルもなかなかするどいね。つーか、アンタ意外にユウのことよーく見てるのね」

「バッカ、誤解を招くような言い方すんなよ！　キリオ、違ぇーからな」

「何言い訳してんのよ」

なんというか、この二人…、息が合ってるっていうか、全然会話に割り込めねぇ。さっきから人の恋路を好き勝手言いやがって。お前らこそどーなんだっての。

でも、いい感じだ、情報は揃ってきてる。
“ヒロ”も出てきた。俺と同じ遅刻常習犯って言ってたな。あれ？　俺って遅刻ばっかしてんのか？　ま、まあいい、もう過ぎたことだ、今日からは違う。

これで例の5人のうち残るはまだ名前すら出ていない“シン”だけか。
まあ、ユウもヒロも名前だけで、まだ会ってはないけど、少しずつ交友関係が見えてきたぞ。

タケルとカオルはあの調子でずっとしゃべり続けている。
俺は記憶喪失を悟られまいと発言をセーブしていたが、そんなこと差し引いてもこの二人の会話は圧倒的だった。いかんせん口数が少

なかったか…？　まあいい、内容は他愛もない話ばかりだ。

それからもう一つ判ったことは、俺は気難しくマイペースだってこと。登校中に会った他の奴らの反応がそういっていた。朝から俺がいることにビックリして、でも次の瞬間には『まあキリオだからな』って、みんな同じ反応しやがった。なんか、遠目には変な奴くらいで、距離感が近いのは御免って感じだ。なるほど、今なら母と妹の態度も理解できる。家族からみても俺は絡みずらい奴だってことか。

第一話　4

生徒の数が増えてきた。ってことは、あの辺りに見えてるあれが学校か。
こっからはどこで誰に会うか判んねーからな、名前が出た奴のことはおさらいしておかないと。

“タケル”は、黒のロンゲでガッチリ系と一見いかにもチャラ男だけど、意外に社交的だ。登校中に会った他の奴等との絡みからも交友関係が広いのが判った。俺とは親友のようだが、少しミスマッチな気がする。まあ、とにかく話し易いし気のいい奴だから、誰とでも合うんだろうな。

“カオル”は、黒のセミロング以外これといった特徴がない。顔立ちはまあ普通って感じだ。タケルと同様に交友関係は広そうで、しかも男女分け隔てない。ユウとは親友らしいから、俺とタケルの関係もこの二人に絡んだものかもしれない。

“ヒロ”は、まだ会ってないけど、話を聞いた感じだとタイプ的には俺に近いみたいだ。ちょっと前まではタケルよりもヒロとつるんでいることが多かったらしい…。まあ、いつも昼過ぎに学校に来るらしいから、詳しいことは本人と会ってから話そう。

“ユウ”は、一見ギャル風だけど真面目らしい。俺が一緒に登校しているせいもあって、タケルとカオルの話はユウに絡んだものが多かった。何をもって真面目というかは人それぞれだけど、陸上部に所属していて朝から練習に出てるってだけで十分真面目だと思う。

正門を抜けると、カオルが突然グラウンドの端に向かって叫んだ。

「ユウー！　おっはよー！」

え！　ユウ！？

自然と目が追いかける。

じゃあ、あこで走り幅飛びしてる…茶髪のショートの子が“ユウ”？

彼女は着地と同時に手を振り返してきた。間違いない、あの子が“ユウ”だ。

しかも、何かに気付いたのか、すぐに手が止まった。タケルもカオルも俺を見て笑っている。

ああ、その何かってのは俺のことか。

ユウがこっちに向かって走ってくる。

それにしても…顔ちーせ…！　いや陸上部だけあって、体が細くて手足が長く見えるせいか。

徐々に近付いて顔が認識できる…って、おいおい、すげー可愛いじゃないか。

恋人未満…！？　いかん意識しちまう。

ユウはグラウンドのネットを隔てた俺の目の前までやって来た。

おわ、目ェでっか。

「キリオ！？　おはよ。どうしちゃったの？」

「お、おう。ちょっとな」

どうしたもこうしたも記憶もない。

とにかくやばいくらいに可愛い。つーか意識し過ぎだろ俺！

「ふうん…。ねえ、昨日って何の用だったの？」

「え、昨日？　ああ、ちょっとな」

「…」

アレ、何かあからさまに機嫌が悪くなったぞ…？

「そうね、どーせ私には関係ないもんね！」

怒った顔も可愛いな、とか思ってる場合じゃない。
ユウはそう言って練習に戻ってしまった。
やっちまった…。

「バーカ」

タケルが一括。

「キリオ！　アンタ、ユウに何かしたんじゃないでしょうね！？」

カオルも俺を責め立てる。

「何もしてねぇよ。多分…」

「多分って何よ！」

「だからキリオ、昨日は何してたんだよ？」

よくしゃべるこの二人に追及されるとたまらない。

「うっせー、知るか！」

こっちは記憶喪失だっての！　ここまで普通に会話できてたのが奇跡だったんだ。ほんのついさっきまで上手くいってたのに、昨日のことなんて知るかよ。

…昨日!?　記憶が消えた日だ。

俺は何をしてた？　誰かと秘密を交わしてた。

待てよ…、今のところ俺の昨日の行動を知ってる奴はいない…。ってことは、その誰かは今日俺が話したメンバー以外になる。だとすると“ヒロ”か“シン”、もしくは“非通知の奴”…、この三人に絞られるんじゃないか？

ヒロは昼にならないと学校に来ない。となると、今はシンを探すべきか。

あながち失敗ばかりじゃない。

「なあ、シンってもう学校に来てるかな？」

タケルはカオルと顔を見合わせ、さあといった表情を返した。カオルはさっきのユウとの件が尾を引いてるせいか、素っ気なく「知らない」と突っぱねてきた。

「な、何か怒ってないか？」

「…」

「じゃなくって、俺達二人ともシンって奴は本当に知らないぜ。誰だそいつ？」

タケルは気まずくなりかけた雰囲気をやんわり収めてくれた。ちょっと助かる。
だけど、せっかく見つけた糸口は、すぐに霞がかってしまった。
“シン”を知ってる奴がいない。

ということは、“シン”とは俺だけが知り合いってことになるよな。
それを探すのって難易度高くないか？　いや、でも、電話はそれなりにあるし、名前も愛称で登録してるんだから気の知れた間柄のハズだ。もう少し様子をみれば、向こうから現れるかもしれない。電話がかかってくる可能性だってある。
そうだ焦ることはない。今日一日でなんでもかんでも判るわけじゃないしな。

だけど、一度気になるとなかなか頭は切り替わらない。
もしかすると“シン”はクラスメートの誰か、とも思ったが、どうやらタケルと俺は同じCクラスみたいなのでそれもない。

「なんだよ、俺の顔に何かついてるか？」

「いや、面白れぇ顔だなあと思って」

「んだと！」

「はは、冗談冗談」

ちなみにカオルとユウはDクラスのようだ。
ヒロはAクラスらしい。
スッキリしない…、後一人だってのに。

俺は部活もやってないし、委員会にも入ってない。クラスが違うとなると、それ以外にシンとの接点が見当たらない。
はっ！　もしや、妹か？
“シン子！”
いや、ないない。アホか俺は。おしんこちゃんって言われてイジメられちまう。
じゃあ、母さん？　いやいや親父？
…違ぇな。そもそも家族を“シン”とは登録しないだろう。。。

「うぅー判らん」

行き詰って机に突っ伏していると、見覚えのないオッサンが教室に入ってきた。スーツ姿で歳は３０代後半って感じ、オデコがきてる若ハゲ気味のこいつは、おそらく担任だ。
その推定担任は特に前ふりもなく「出席を取るぞ」と言った。

「相田ショウ」

「はい」

「石川セリカ」

「はい」

・
・
・

「堀田トモヤス」

「はい」

「柳キリオ」

「はい」

「…は欠席と。お！」

ここで流れが止まった。

「おお、すまん、柳。今日は出席か」

教室内がザワついた。

「マジ、キリオ来てんぞ」

「朝キリオだ」

さっきから席にいただろ！

今更気付く奴がいるとは。登校ん時もそうだったけど、朝から来たくらいでツチノコ発見みたいに騒ぐな。

「大和タケル」

「ぼはぁーい」

タケル…、お前なんて言ってるかよく判んねぇよ。

「和田ツトム」

「へーい」

それにしても、注意して出席を聞いてみたが、やはり“シン”にあたりそうな人物はいなかった。こりゃあ俺から電話しちゃった方が早いかもな。

「なあタケル、俺が朝から来たのっていつぶり？」

「朝？　ああ、遅刻じゃない日か」

「うわ、皮肉かよ」

「ちょうど二ヶ月ぶりだな。そん時も確か俺、キリオと登校したから間違いないぜ」

その時も？　なんだ、ただの偶然か？

キーンコーンカーンコーン

おっと予鈴だ。とりあえず授業は静かに受けるとするか。ここまでは順調だしな。この調子で情報を集めていれば、途中で記憶が戻るかもしれない。

一限目は数学だった。

机の中にあった教科書を開き、教壇に立つ教師の説明をしばらく聞いてすぐ異変に気付いた。おかしい…、とてもじゃないが理解できない。

そうか！　失われてしまった記憶の中に、きっと勉強の知識も全て

含まれてたんだ。昨日までの俺は天才だったに違いない。
黒板には意味不明な暗号が連なり続けている。それをノートに複写するはずのペンは、既に俺の手元にはなく、鼻と口の間に挟まっていた。

それにしても辛い…興味のない話ほど長く感じる時間はない。
そうだ、この長い時間を無駄にしないよう、やるべきことを整理しておこう。再びペンを持ち、ノートの上を走らせる。

―次に何をするべきか―

第一話　5

休み時間に入るとすぐに屋上に向かった。
授業中ずっと考えていたこと…、漠然とした勘だけど、今の自分のキャラを分析すると、“屋上”と“保健室”は外せない気がしていた。おそらく普段から俺はそこによく行き、残りの一人“シン”とは、そこで交流があったんじゃないかと思ったワケだ。
学園ドラマやアニメでいえば屋上は定番のシーンだからな。だけど、今時はどこの学校も閉鎖しているだろう。
過度な期待はしてないが学校散策だと思って階段を上る。

『開放中』

予想に反して、屋上に出る扉には文字通り来る者を歓迎するプレートが掛けられていた。
なんて危機管理の薄い学校だ。

ギギィ…

重苦しい鉄の扉を開けると、そこには校舎の敷地分のスペースがそのまま広がって開放感に溢れていた。
“開放中”とは…、上手いこと言ったもんだ。
入り口から少し歩いて辺りを見回すと、男子生徒が一人、金網に寄り掛かっていた。
彼もこちらに気付き手を挙げている。

「よう、珍しいじゃん」

「おう。ちょっとな」

もう相手が誰であろうと、とりあえず自然と返事をしてしまう。既に条件反射だ。

さーて、コイツは誰だ?

俺はこの謎の男子生徒に歩み寄った。おそらくこいつが“シン”だろうと思いながら。

「何見てるんだ?」

「べっつに…、お、今日はサッカーやるらしいな」

グラウンドに集合した生徒達がサッカーボールの入ったキャリーを運んでいる。

整列し、教師が何か言ったかと思うと、整列の間隔が広がった。

ああ、準備体操か。

「お、あのガタイがいい奴はタケルか」

待て、なんでタケルがあそこに…って!

「俺も体育じゃんかよ!?」

「あ? なんだよ今頃、どーせサボんだろ?」

くっそ、せっかく真面目に授業に出たのに…、一限目だけだけど。

仕方ねー、今は授業よりこっちが優先だ。

ピー！

「お、始まるぜ」

始まるとすぐにボールがタケルに渡った。すぐさま相手チームの一人がタケルに近付いてきたが、すかさずパスを出して凌いだ。

「へぇ、様になってるじゃん」

うちのクラス結構うめぇな。ほんの数分だけどすぐに判った。タケルだ、あいつ超うめぇ。

「やるじゃんキリオのクラス。特にあの司令塔の大和、アイツは別格だな」

「大和？」

「あ？　お前、いっつも一緒だろ？」

おおおう？　“大和”ってタケルのことか？　そういや出席順、俺の次だったな。

「そこ、センタリング！」

「いけ、センタリング！」

今の俺の声か？

「ばか、ハモんじゃねぇよ」

ああ、こいつか。

タケルからセンタリングが上がる。
オフサイドにはなってない、うまい！

「走れ、合わせろ！」

「いけるぞ！」

クラスの名前わかんねー奴、頑張れ！　いける！
足が届いた！　キーパー抜けた！！

ピピィーッ！

「うおっっしゃあ！」

「まずは1点！」

思わずハイタッチする。

「タケルのやろー、こんな特技があったとは」

「なんだよ、知らなかったのかよ。でもいいのか？　相手はDクラスだろ。カオルもユウも相手チームの応援だぜ」

「げ、本当だ」

女子は両サイドから応援している。その中には確かにユウとカオル

の姿が。しかもゴールを決めたうちのクラスにブーイングしてる。
うああ、タケルつれえな。
って、コイツさっき“カオルもユウも”って言ったか？
タケルとカオルはシンを知らない…、だとするとこいつは“シン”じゃない？

おっと、またタケルにボールが、左サイドがフリーだ。

「うっしゃ、左がガラ空きだぜ！」
「おらー、左サイドあがれー！」

また、コイツ、同じようなこと…。

あれ、なんかグラウンドの連中がこっち見てるぞ？

「はは、熱くなり過ぎたな」

「あー、そゆこと」

体育教師らしき先生がこっちを見ている。

「コラ貴様等！　とっくに授業始まっとるぞ！！」

「はは、やべーやべー」

二人ともすぐに屋上の入り口に向かった。
あれ？　そういえば、こいつもサボリだよな？　それになんか気が合うっつーか…。
確かタケルとカオルの話の中でそんな奴がいた気がするな。俺と付き合いがあって、似た感じ…。

そうだ思い出した！　“ヒロ”だ！
今更ながらまじまじと見ると、髪は金髪、目は釣り目、細見でシャツはだらしない。
間違いねーだろ！

「ったく、お前昼から来るんじゃなかったのかよ！　ヒロ！」

「あ？　お前こそ朝から来てんじゃねーよ！　キリオ！」

お互い顔を見合わせ笑ってしまった。

「ぷっはは、何の偶然だ。いっつも遅刻する二人が揃って朝から来てるなんてな」

「ああ。だけど、授業サボってる時点で朝来た意味ねーけどな」

「違ぇーねー」

なんだ、この心地良さは。タケルとは違う話しやすさ？　いや、もっと感覚的なもの…。
とにかく、こいつはヒロで確定だ。これで四人目！
となると、残るはまだ会えてもいない、情報もないシンだけだ。
そして俺の交友関係上、ピースにはまっていないのもシンだけ、しかも手掛かりすらない。
裏を返せばつまり…、ここをクリアすれば大きく道が開けるってことじゃないか？
あくまでこれは俺の勘だが。

「じゃな、俺、教室戻るわ」

「ああ、じゃあなヒロ」

なぜか今の俺はとても心地いい。気運ていうんだっけ？　この流れのまま一気に5人目だ。

よし！　シンに電話をかけよう。

携帯の履歴を開きコールに手をかける。一瞬だけ指が止まった。

「全く面識のない奴に電話するのって緊張するな」

はは、何を今更。今日一日ずっと似たようなことの繰り返しだったじゃないか。基本的に受け身でいればいいんだ。

あれ？　俺から電話するのに受け身でいいのか？　まあこの際もうどうでもいいや。

プルル…　プルル…　ガチャ

出た！

『はい』

男の声だ。

「あー…、オレオレ」

しまった、これじゃあ何かの詐欺みたいだ。

『おう、キリオか。どした？』

お、この感じ、結構仲が良さそうだな。

「ああ、ちょっとな。それよりシンは今どこにいるんだ？」

『どこって？　普通に学校だけど』

あれ、シンも学校の生徒じゃないか、なのになんで誰も知らないんだ？

「なんだ、学校来てたのか。なら昼飯一緒しねえ？」

『あ、ああ！？　えーっと、いいケド。お前んとこのガッコ、河川敷のさらに向こうだよな。もしかして近くに来てんのか…？　ああそっか、サボりかー？』

おおっと、違う学校かよ…。どうりで誰も知らないワケだ。

「いや、悪ぃ。やっぱまた今度な」

『あ、おいキリオ！　何だよ変な奴だな』

「ホント悪い。じゃあな」

話半分になってしまったが、電話を切った。これ以上話し続けたら不審がられるのがオチだ。

それにしてもシンは俺とどういう関係なんだ？　同中か？

いや、それがわかったところで何かが大きく進展するとも思えない。

他の誰とも絡みがないんだからな。

たーく、なにが“大きく道が開ける”だ…、たいした勘だぜ。

でもこれで俺の周りの主要な人物は把握できたことになる。今日はこれで充分だ。後は家に帰ってキチンと復習しとけばバッチリだろう。

…って、俺、ちゃんと家に帰れるかな…。

＃つづく

第二話　恋がしたいっ！

記憶をなくしたあの日から数日経った。
今日も一日なんとか乗り切った。タケルは珍しく用があるとかで、久しぶりに一人で帰っている。

ユウとは…あれ以来、あまり話していない。言い訳するのも変だと思ったし、ユウはいつも部活ってこともあって、キッカケが作れないままだった。

相変わらず綱渡りみたいな毎日を送ってるけど、変わったこともある。
日を重ねるごとに余裕が出てきた。記憶は戻ってないが、つまりは新しい俺が、新しい“自分”を築き直しているってことだ。

それに思いの外、今の俺はうまくやっている。
例の5人を中心に、家族とも、他の奴らとも積極的に会話するようになった。単純なことだけど、話しをすれば少なからず得るものがあって、何もしなければ進展はない。それが判ったんだ。
まあ、シンだけは別の学校ってこともあって、未だに会ってないけど。

こうして一人でいる時は、自然と自分の行動や周りの反応を整理する時間になっていた。だけど…、何か引っかかる。何か忘れてないか？

河原沿いの道を歩いていたら、高架下にふと目が向いた。視線の先には猫とじゃれている少女が見えた。
長い黒髪と整った容姿、ちょっと目を向けただけなのに、俺はその場に立ち尽くし、その少女を見つめていた。なぜか目が離せなかった。

彼女から伝わってくる感じ…、清楚とか？　いや、もっとほかの何か…。河原を背にした彼女からは哀愁のようなものが窺える…。
なぜだろう…、猫とじゃれているだけの他愛もない光景なのに…、この切ない気持ち…、憂い…、彼女が気になってしょうがない…。

「あの子はいったい…」

ついさっき見かけた名前すら知らない子だぞ？
以前の俺はユウが好きだったハズだ…、それなのに、ユウ以外の子が気になるなんて…。

新しい自分…、ってことは、これまでの人間関係を変えてしまう可能性もあるってことなのか。

「どうすりゃいいんだ…」

立ち尽くす俺を我に返したのは、携帯のバイブだった。ディスプレイを見ると“非通知”の文字。
さっき思い出せなかったのは、これだ！！
未だ一切の関係が判っていない“非通知の人物”、この電話はそいつからだろうか？　だとすると記憶をなくした時の自分と最後に話をしたかもしれない相手…。
どうする？　出るべきか？　早く決断しないと切れてしまう。

俺の信条は…、何もしなければ何も進展しない！
通話ボタンを押した。

「もしもし…」

『…』

返事がない。

「もしもし？」

『ねえ、アナタ今どこにいるの？』

女の声？　違う…？　いや、何か変声機を使ってる？
音声変えて電話って、どう考えても怪しいだろ。どうする？　正直に答える必要はない。

「ああ、今学校だけど…」

『何嘘ついてんの？』

「えっ？」

なんだ？　まさか、俺をどこからか見てるのか？　辺りに身を隠せそうなところは…、たくさんあるな。

『探せっこないって』

…！　やっぱり！　確実に見られてる。いったい誰が？　そもそも何が目的なんだ？

「俺に何の用だ？」

『用も何も、アタシが誰だか判ってないでしょー？』

やっぱり女？　女の声はどこかふざけた感じだ。俺のことからかってやがるのか。

こいつが、あの日の非通知の相手…。

「えっと、どちらさまでしたっけ？」

『ひどーい、本当に忘れちゃったの？』

“本物に”だと！？

こいつは…、俺の記憶がないことを知っているのか！？

「待っ…」

ガチャ

『プープープー…』

ちょっと待て！　ここで電話を切るか？　おいおい、話も途中だったじゃないか。なんだこの尻切れトンボは。

どこの誰だか判らないけど、俺の記憶喪失に気付いている奴がいた…。

俺は、今のところ誰にも気付かれずに上手くやっていた…ハズだ。

どこかで不自然な行動をとって見抜かれていたとか？　いや、あの

口ぶりは明らかに始めから知ってる感じだった。

まさか…、“秘密”を交わした相手は奴か？
俺がそれを覚えているかの確認？
覚えていないと判断して電話を切られた？
くそ、駄目だ！　何を考えても“？”がついちまう。

家に着くまで、非通知の女（だと思う）のことが頭から離れなかった。
ここしばらく、日常に溶け込み出したこともあり、そっちに気を取られ過ぎていた。しばらく忘れていた“秘密”のこと。
そうなんだ、その手掛かりをつかむ為に、自分と交流のある人物をあたっていたんだ。それがあの5人。そして5人とは別に存在する最後の一人、“非通知の人物”がついに現れた。
だけど、どこの誰かも判らないんじゃ、俺からは動きようがないか…。

「いや…、あるぞ！」

唯一の手掛かりは、奴が俺を見張ってるってことだ。それを逆に利用すれば…！
次こそは必ず“非通知の女”の尻尾を掴んでやるぜ。

第二話　2

翌朝、家を出るとユウが待っていた。

「おはよ、キリオ」

「お、おう、どした？」

「今日朝練ないの。だから一緒に学校行かない？」

「ああ、行こーぜ」

ん？　朝練がないと一緒に学校に行くものなのか？

それにしても、横を歩くユウを改めて見ると…やっぱり可愛い。茶色がかったサラサラのショートが歩く度に小刻みに揺れる。つーか本当に目ェでっけ。特に化粧っ気がないのにこれだ。

だけど、ドキドキ感はない。

やっぱりそれは、河原にいたあの子が気に掛かっているせいか。

そういえば今の俺はユウとちゃんと話したことがなかったな。趣味とか好きな食べ物とか、何も知らない…。

「この間はゴメンね」

「え、何が？」

「なんか私、態度悪かったから…」

ああ、あの始めて会った時か。ずっと気にしてたんだ。別にユウが気にすることないのに。

「ああ、気にしてないよ」

「そっか…」

待てよ。この間もそうだったけど、素っ気ないのは駄目だ。ユウは見た目は垢抜けてるけど、中身は相当真面目だ。逆に気にかけ過ぎなぐらいじゃないと駄目なんだ。

「ウソ…、けっこーきた。俺って打たれ弱かったのな」

「そっか。あはは、ゴメーンね」

あどけない笑顔が返ってきた。やっぱり、この子は笑ってる方が似合ってる。

「ユウが陸上やってるのって、やっぱり走るのが好きだから?」

「え?　まあ、それもあるけど、自分と向き合えるからかな」

「自分と?」

「そ。悩んだりした時なんかは、ひたすら走ったりする」

「うわっ、ソレ、どMじゃん」

「ち、違うわよ！　なんていうか、自分の中で答えを出すっていうか…」

「ふーん、そういうもんなんだ？」

「そういうものなのっ！」

はは、けっこ頑固だ。

「昨日は…、ちょっと思うところがあって、ずっと走ってたんだ」

「悩みってやつ…？　それで、答えは出たの？」

ユウの足が止まった。

「内緒ー」

「なんのフリだよっ」

「いーの。あ、こっちから行かない？」

ユウが立ち止まって指差したのは学校の裏門の方だ。

「いいけど、遠回りだぜ」

「いーのいーの、せっかく一緒なんだから、もう少し話したいなって」

くあーっ、こいつ可愛いなあチクショー。

この道も一応通学路だ。少ないとはいえ生徒が歩いている。

「おっすキリオ」

「ユウおはよー」

ちらほらだが見慣れた顔もいた。誰も俺達が一緒に登校していることに驚いた様子はない。公認の仲良しグループ扱いってことなのか？

学校の裏門に着いた。

へえ、ここに繋がるのか。まあ遠回りだし、まず使うことはないな。

ユウとはクラスが別なので、正面玄関前で立ち止まる。

「じゃ…」

「おっはよー！」

勢いよくカオルが現れた。

「あ、カオル、お、おはよ」

「よっ」

「あれ、キリオとユウが一緒？　今日の朝練は…もごっ」

「わっ、じゃ、じゃあねキリオ。今日はありがと」

ユウはカオルの口を押さえ付けながら校舎に入っていった。

「なんだありゃ？　それに、ありがとって？」

後ろを振り返ると、グラウンドでは陸上部が朝練をしていた。
ああ…、ユウは朝練がないって言ってたけど、あれは嘘か。
今日に限って裏門から…、なるほど、こっちのルートからだとグラウンドは見えない。

俺だって少し考えれば判る。理由は明白だ。
ユウは俺と仲直りしたかったんだ。
ユウは真面目だから自分から誘うとか苦手なんだな。それで精一杯の口実が朝練がないってか。
あはは、そんなのすぐにバレるだろ。まったく、嘘までカワイイのな。

ユウは多分、俺に好意を持ってくれている。
まだ彼女の中ではボンヤリした感じなのかもしれないけど、それは俺の態度がハッキリしてないせいもあるんだろう。
ユウのことは気になってる…だけど、付き合いたいってワケじゃない。記憶を失っていなければ…、俺がもっとユウのことを見ていれば、二人は付き合ってたんだろうか？

そういえばおかしなもんだ。ユウのことといい、河原の子といい、俺、記憶喪失だぜ？　なのに“好き”とか言って、なんか笑えるよな。

「！？　あ…」

ウワサをすれば、例の河原にいた子じゃないか！
彼女、同じ学校だったのか！？
彼女のいる下駄箱の場所は三年生の…、年上だったのか。どうりで大人っぽいと思ったんだ。

すぐに名前も判った。
“アイ”。
彼女の友達が彼女をそう呼んでいた。ピッタリのいい名前だ。

彼女が同じ学校だと判ったものの、俺との接点がないことには変わりない。
でも何か話したい…、落ち着かず、休み時間の度に校内をうろうろしていた。
キッカケがほしい…。
そう思った矢先…、前からアイが歩いてきていた。

「…！」

咄嗟（とっさ）に体が隠れようとする。
何やってんだ俺！　今“キッカケがほしい”って思ったばかりだろ！　逃げるな！
それに…、一度記憶をなくしてるんだ、これ以上失うものなんてないだろ！

俺は近付いてくるアイに勇気を出して声をかけた。

「あの…、すいません」

「はい？」

「よ、よく河原の高架下にいますよね？　俺もあそこよく通るんで…」

何言ってんだ俺は！？　よく通ってたら話しかけるのか？　これじ

ゃ不審者っぽくねぇか？
アイは驚いた顔で俺を見ている。信じられない、といった表情だ。
やべ、なんかまずいこと言ったかな？

「…まさか君の方から声をかけてくるなんてね」

「えっ？」

アイは俺を知っている？
いやでも、それを聞くワケにもいかない、なんて切り返す？

「えっとそれは、どういう意味ですか？」

濁してしまった。

「ふーん…。ねえ、それじゃ明後日のお昼に改めてあそこの高架下で話さない？」

「はい？」

「決まり。じゃあ日曜の2時に高架下に来てね」

「は、はいっ！」

アイは足早に行ってしまったが、ひいき目にみても嬉しそうに見えた。

第二話　3

日曜にアイと会う約束…、それもアイの方から誘ってくれた。
少しだけ浮かれていた俺の元に、また非通知の電話がかかってきた。
なんて間が悪いんだ。奴がどこからか俺を見ているとしたら…、まさか、非通知の女は同じ学校の奴だったりしないよな？

「…もしもし」

『ハロー久しぶり。なかなか出ないから着拒されてるのかと思っちゃったー』

「何の用だ！」

『やだ怒んないでよ。この間の続きよぅ』

相変わらず人をバカにしたような口調だ。声も変声機を通した例の高いトーンだから、尚更イラっとくる。

「お前…、何を知ってる？」

『何って…、もしかして秘密のことかなー？』

「！」

こいつは…！
やっぱりあれは夢じゃなかったのか？　じゃあ俺が秘密を交わしたのも…！

いやまて、まだ確証があるわけじゃない。

「何のことだ？　秘密って？」

『あはははー、無理すんなって。アンタの記憶のことだよ』

「な！　お前は…、いったい何者だ！？」

こいつは！　秘密だけじゃなく俺の記憶のことまで知ってるのか！？

『日曜２時に駅前のパン屋“サンライズ”で待ってて、アンタの秘密を教えてあげる。あと、メロンパン１０個よろしくね』

「えっ、日曜は…」

プツッ

『ツーツーツー…』

「くそう、切りやがった」

日曜の２時って…、アイとの約束があるってのに。

どうする？　あの感じ…、非通知の女は俺の秘密を確実に知っていると考えるべきだよな。

俺の目的はなんだった？

秘密を調べること…、だったら迷うことはないはずだ。

だけどそれは、信用できる相手を見つけて、一緒に協力しながら調

べるつもりだった。
あの非通知の女は少しも信用できない。当日だって正直に姿を現す保証はない。
いつも陰から人を監視して、あの人をからかうような口調…、もしかすると俺を見て遊んでいるだけかもしれない。
だけど、遊んでいるにせよ、俺に秘密を教えるにしろ、奴に何の得があるんだ？
そういや“メロンパン１０個”って言ったな、それが奴の目的か？
いや、そんな訳ないだろ。

「判んねぇ…」

ブブブブブ…

また着信がきた。

「やろっ、懲りずにまた！」

ディスプレイの文字は“ユウ”と表示されていた。
ユウから！？　今朝一緒に登校したばかりなのに、ワザワザ電話ってなんだ？

「もしもし？」

『あ、ごめんねキリオ、今だいじょぶかな？』

「あ、ああ、へーキだけど」

心なしか、ユウの声が緊張してるように聞こえる。

『今度の日曜…とかさ、時間、あったりする？』

「え、日曜！？」

しまった、驚いてつい声が高くなった。いくらなんでも立て続け過ぎだろ！？

『あ、ごめん、なんか用事入ってた？』

「日曜は、ちょっと用が…」

『そっか、ごめん。別に大した用じゃなかったから気にしないで』

「ワリ…」

『ううん、それじゃね』

「おう」

電話を切ってすぐに、後ろめたい感情が俺を襲った。

ユウの誘いを断ったのは…、秘密を知りたいって気持ちからか、それともアイに会いたいって気持ちからか。

いずれにせよ、自分の中でハッキリ答えが出せないと言っておきながら、今の対応はユウが“最優先”ではないことを示していた。

「くそう…、なんでこうも全部重なるんだ！」

それも違うか…、タイミングが重なってなきゃ全てに顔を出してい

いのかよって話だよな。

「くそっ、何やってんだ。もっとちゃんと考えろよ、俺」

―昔の俺と今の俺、どっちか気持ちをハッキリさせる必要があるんじゃないか―

第二話　4

日曜日、悩んだ末、俺が向かったのは高架下だった。
アイにしても非通知の女にしても、俺はどちらの連絡先も知らない。
ということは、どちらかの約束はすっぽかすことになる。
だから俺はアイを選んだ。

別に秘密のことがどうでもよくなった訳じゃない。
だけど、それよりも気になったのは、アイが俺を知っていたってことだ。
二人は知り合いだったのか？　それともアイが一方的に俺を知っていただけなのか？

2時ちょうどに高架下へ着くと、既にアイが待っていた。
あの時と同じ…、河原を背にアイと猫がじゃれている。
やっぱり目が離せない。前に見かけた時は立ち尽くすだけだったけど、今は違う。
アイに引き込まれるようにして足が進む。
やべ、緊張してきた…。
アイのすぐ近くまでくると、じゃれていた猫が俺に気付いて逃げてしまった。

「あ、ゴメン」

続いてアイも俺に気付く。

「や。いいよ、あの子は君の変わりだから」

「？」

日曜の真っ昼間とはいえ、人気の少ない河原に二人…。なのにアイは全くといっていいほど警戒がない。
つまり、お互い顔見知りってことだ。

「来てくれてありがとう。お礼にいいこと教えてあげる」

これまでの寂し気な感じと違い、明るい口調で話し出したアイはどこか嬉しそうだ。

「いいこと？」

「私とアナタ、実は付き合ってるんだよ。知ってた？」

ええっ！　それって昔話？　それとも進行系なのか？

「付き合ってた…？る？」

アイの顔が少し赤くなったのが判った。

「る…」

うはっ！　ちょっとどうなってんだよ俺！　まさかの展開じゃないか！
どうりで妙にアイのことが気になった訳だ。

待てよ、喜ぶのはまだ早い。
最近の俺ときたら…、やたらユウと仲良くしてなかったか？　でも、

アイはそのことを詰ったりしてこない。なんでだ？
この間もアイは俺を無視して素通りしようとしていた…、それってつまり、もしかして？

「えっと、あの…、まさか俺の記憶のこと…」

「…知ってる」

げ！
でも…、そりゃそうか。
付き合ってたんなら、不自然だって気付いて当然だよな。

「だって、付き合った次の日からここには来ないし、すれ違っても無視よ。普通あり得ないでしょ？」

「うわ、ご、ゴメンなさい！」

うひゃー、なんか色々つじつまが合ってきた。

「いいのよ、また一から始めれば。ただ、ウチってすごく厳しくてね、付き合うとかＮＧで、しかも歳下で、さらに記憶喪失なんて、ふふ」

「あははは…かんべんして…」

「だから、このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「ああ、わかった」

あれ、このシーンどこかで…？

！！

俺の顔色が変わったせいか、アイが心配そうに覗き込んできた。

「どうしたの？」

「いや、俺が唯一覚えてたこと…この場所で同じ台詞を…」

「覚えてるの！？」

“同じシーン”、“同じ台詞”、その後俺は記憶をなくした…。

ちょっと待て…！　なんだこの漠然とした不安感は！？

まさか…。非通知の女が頭をよぎる。考えが悪い方に向かっている…。

「アイ…」

「何？」

「俺に電話したことある？」

「ないけど。私、携帯持たされてないから…。どうして？」

「俺、記憶をなくす前に誰かと電話で話してるんだ」

「…！　それが私って？」

「いやゴメン！　判らないんだ、覚えてなくて。付き合ったその日

なら電話くらいするんじゃないかと…」

「確かにね。でもウチはアレだから…、電話すらできないし、ウチの番号は伝えてないからキリオがウチに電話することもあり得ないわ」

「そっか、そうだよな。良かった…」

そうだよ…アイが非通知の女のワケがない。今だってほら、記憶はちゃんと残ってる。

「良くない！」

「え！？」

「早く言いなさいよ、そういうことは！」

「え？」

「記憶がなくなる直前に電話で話してたんでしょ！？　記憶喪失と関係あるかもしれないじゃない！　誰と話してたの！？」

えらい剣幕だ。そりゃそうか、誰かのせいでこうなったのだとしたら、アイだって被害者だ。

「いや、だから判らないんだってば！　電話は非通知だったし、けどそいつは俺の記憶のことを知っていた…」

「ねえ、それって本当に記憶喪失なの？」

「え、どういうこと…？」

アイは神妙な面持ちで思いがけないことを言った。

「もしも…、もしもよ、その電話の相手がキリオの記憶を消したとしたら…」

「…え？」

そんな可能性、考えもしなかった。単純に記憶喪失だとしか…。別に知らない病気じゃないし、誰だってなる可能性がある。たまたまそれが自分だっただけで仕方がないと思っていた。

「そんなバカなこと…」

あり得ない。

「わかってる。でも…、記憶がなくなる前に電話があって、記憶をなくした後もそうして連絡がある。さっき言ったことは考え過ぎかもしれないけど、怪しい人物ってことは確かよ」

アイは腕組みをし、右手をあごの下に持っていった。きっと、あらゆる可能性を考えてくれているのだろう。それって俺の為…？

「やっぱり良かった」

「だから何が…」

「記憶をなくす前も今も、アイを好きになって良かった」

すっと出た言葉に俺自身驚いた。
アイもびっくりした顔でしばらく固まっていたが、コクリと小さく頷くと俺に寄りかかってきた。

「淋しかったんだからね」

「ゴメン」

「キリオは謝ってばっかり」

「はは、ホントだ」

にゃーご

さっきの猫が戻ってきた。

「キリオ！」

は？

「今なんて？」

アイは“しまった”といった感じで顔を赤くした。

「だから淋しかったって言ったでしょ！」

俺の名前を猫に…？
ずっと待っててくれたんだ…。

“秘密”も“過去の記憶”もまだ判らない、だけどそれ以外の大切なことを気付かせてくれた。
今日ここに来て…アイと話せて良かった。

第二話　5

「そろそろ帰らないと」

アイはそう言ったが、まだ日も暮れていない。

「え、もう？」

「門限」

さすがはお嬢様だ。

「ホントにあるんだそういうの」

「まあね。さっきは話切られちゃったけど…」

「ん？」

「今後、非通知の電話は一切出ないこと！！　いーい？」

「…わかった」

しっかりアイに念押しされ、お互い河原をあとにした。

家に着くと待っていたかのように妹のサヨがリビングから出てきた。

「おかえりお兄ちゃん。さっき森戸さんって女の人から電話があったよ」

「森戸…」

ユウから？

「ああ、そっかサンキュ」

なんで家に？　携帯にかけりゃいいのに…。

携帯を見るとユウからの着信が二件、ついでにタケルからも一件入っていた。

しまった、それで家にもかけてきたのか。昨日はユウの誘いを断っちまったからな…。一応かけ直した方がいいよな？

自分の部屋に行き電気をつけた。

ブブブブ…

着信だ。ユウ、それともタケル？

「もしもし…」

電話に出る瞬間、一瞬だけどディスプレイに“非通知”の文字が見えた。

しまった！！

『今回は早かったね』

この高いトーンは、やっぱりあの女の声だ。早く電話を切らないと。

『ユウは…』

!?

なんでユウの名前が出てくるんだ？　すぐに電話を切らないと。だけど…、こいつは俺が知っている誰かなのか!?

『ユウは今日、ずっと駅前でアンタを待ってたんだよ』

駅前？　どうして？

俺との約束じゃない。こいつまさか、俺だけじゃなくユウにまでちょっかい出してんのか!?

「お前は誰だ!」

『アタシ？　あっはっはっは!』

女は受話器の向こう側で高らかに笑っている。

『アンタどうせ忘れちゃうのに聞いてどうすんのさ!』

この声のイントネーション…

『耳を澄まして考えても判らないよ!　特別な電話使ってんだから。それと…アタシの声は電話ごしだと妙な力があってね』

もう少し、この感じ…思い出せそうなのに。

『…記憶を消すことができるの』

!?

「なっ！」

な…に？

ふざけてるのか！？

『もっと別の力が良かったのに、記憶を消すだけなんて。しかも都合よく操作することもできない』

とにかく話を延ばさないと。

「何言ってるんだ…そうだ、秘密！　秘密って何だったんだ？　どうせ記憶が消されるなら最後に教えてくれよ！」

『ダーメ』

「なんで！？」

『アンタ…、今メモとってるでしょ？　サヨナラ』

マズい！　電話を切らないと…

『リセット』

プー・プー・プー

#つづく

第三話　また記憶がないっ！

「アイお嬢様。お申し付け通り、彼の交友関係とその友人を調査いたしました」

「ありがとう橘」

橘はうちの中でも特に優秀な執事だ。彼が調査報告をする時は、決まって有用な情報を持ち帰ってきている。

「それで、何か分かったことは？」

「“柳キリオ”、彼の症状は記憶喪失とは違ったようです」

「やっぱり…。それは記憶が操作されたということ？」

「はい、おそらく。ただ、記憶を操った方法や手段は解りませんでしたが、該当者は一人に絞られました」

「そう…」

ごめんねキリオ…、こんな探偵みたいな真似ごとして。
貴方の友人を疑いたくはなかったのだけれど、あまりに貴方の様子が急変してしまったから…。
それに…、もう二度とあんな想いはしたくない。

翌朝、真相を伝えようと、キリオが家から出てくるのを近くで待つ

ことにした。

―どうしてキリオの記憶は消えてしまったのだろう？―

ずっと抱いていた疑問…、それは昨日、本人に話しを聞いて判った。
キリオが何らかの“秘密”を知っていること。その“秘密”を記憶ごと消し去った人物がいること。
橘からの報告で、その人物が誰かも分かった。それがキリオの身近な人物であることも…。

緊急の要件なのに電話できない家の事情が煩わしい。いずれにしても、急いでキリオに伝えるべきだと足を運んだ。

「いってきまーす」

出てきたのはキリオではなく女の子だった。妹さんかな？
そういえばキリオって朝弱いんだった。学校で待つべきだったかな。
そんな心配を他所に、しばらくするとすぐにキリオは出てきた。なぜか妙にキョロキョロしている。

「ぷっ。なんかキリオってば挙動不審。意外な一面見ちゃった」

それはそうと、早くキリオに伝えないと。

「おはよー」

声をかけつつ駆け寄ると、キリオもこちらを振り返った。
けれど少し不自然な間が空いて、お互いの目が合った時、キリオは

やっと呼ばれたのが自分だと気付いた。

「…えっと君は？」

なんかキリオの様子が変だ、私のこと判ってない…？

「キリ…」

待って…、まさか！？

「あっ、いえ、人違いでした。ゴメンナサイ…」

何を謝ってるんだろう私。でも、この感じは前にも一度経験したことがある…。なんで？　どうして？　やっとまた距離が縮まったと思ったのに…。

キリオはゆっくりと私から遠ざかってゆく。

離れたその場所から声がする。

「おっす！　キリオ！」

キリオの親友の大和タケルだ。

「お、おう」

「おっはよっ！　二人とも」

あの女…！

「おっす！」

「お、おう」

「な～に、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

こっちを見て女が笑っている。

やられた…！

さらに女はキリオに何か話している。何を言っているの？

少しするとキリオだけこっちに戻ってきた。私と目が合うと、キリオは軽く会釈して通り過ぎようとする。

「ちょっと、学校はそっちじゃないですよ」

「知ってます。友達の家に寄るんで」

！？

友達って、森戸ユウのこと？

でも、あの子は朝練に行ってるはず…、まさか今日はまだ家に？

あの女さっき笑っていた…、いったい何考えてるの…？

頭の中では色々な憶測がぐるぐるしながらも、遠ざかるキリオを黙って見ているしかなかった。

今回も、その前も、付き合った次の日にキリオの記憶が消された…。

偶然じゃなく目的があるのだとしたら…、狙われてるのはキリオ？

それとも私？

第三話　2

―またキリオの記憶が消された―

あれから私はキリオの行動を追っている。
以前は何が起きたか解らず、ただショックのあまり塞ぎ込んでしまったけれど、今は違う。
私だって、いつまでもじっとしたままじゃない！
あの女は消した記憶の確認か、あるいは別の目的があるのか、どちらにしてもキリオか私を監視する為に近付いてくるはずだ。
私がキリオを、橘が私を尾行する。何も知らずにあの女が尾けてくれば、二重尾行になる。まさか自分が尾行されるとは思いもしないはず。

遠目に追い続けるキリオの背中…、今日は一人。
この道は、キリオが家に帰るにしてはだいぶ遠回りみたいだけど…。
…！
こっちは…、あの高架下の方だわ。

キリオとの想い出が蘇る。あそこで二人は付き合う約束をした…。
記憶をなくしても、どこか頭の片隅で覚えていてくれているのかもしれない。

だけど、そんな私の淡い期待はすぐにひっくり返った。
河原には…森戸ユウの姿があった。

どうしてあの子が？
キリオは彼女に近付いてゆく。

な…に…コレ？

私と森戸ユウが入れ代わったようなシチュエーション…。
何が起きているの？
まさかキリオ…、こんなことで付き合ったりしないよね？
駄目だ…見ているのが辛い。
弱気な自分が現れ、その場を去ろうと振り向いた先に、あの女が立っていた。

「貴女…！」

思わず声をあげてしまう。
しかし、女はとぼけた顔をしている。

「え、アタシ？　どこかでお会いしましたか？」

「このっ！」

「あっ、すみません。うちの学校の先輩…ですよね？」

「白々しい！　ふざけないで！」

カッとなってさらに声が大きくなる。
一瞬、間を空けて女はやれやれといった感じで続けた。

「あまり大声を出すと、あの二人の邪魔になりますよ」

目でキリオと森戸ユウを見る。
いつの間にか二人はなんとなくいい雰囲気になっている。
「なんかお似合いですよねーあの二人。あはは、髪の色も一緒だし」
何が言いたいのよ？
「それじゃ先輩、失礼しまーす」
女はそう言って一礼すると、河原に降りていった。
「ユウー、キリオー」
ちょっと…！？
キリオか私の後を尾けさせようと考えていたのに、どちらにも直接連絡んでくるなんて…！
まさか牽制してるつもり？　こっちの思惑が読まれてるなんてこと…、そんなはずはない！
だとしたら、あの女の目的は何？　キリオと森戸ユウをくっつけること？
いや、そんな理由でキリオの記憶を消すなんて考えられない！　必ず裏があるはず！
こうなったら徹底的にあの女を調べるしかない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2921w/

記憶がないっ！

2011年10月11日07時56分発行